

理科 第4学年 季節と生き物(2) ○夏の生き物

授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。啓林館の年間指導計画にある「季節と生き物(2) ○夏の生き物」に対応した独自案。教材本文・挿絵・問題文は転載していない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

本案で見るのは、児童が「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」に対し、観察結果と考えを区別して答えられるかである。暖かい季節になると、身近な動物の活動や植物の成長の様子が変わるというまとめを暗唱できるだけでは、本時の目標に届いたとは判断しない。春と同じ対象の記録を日付と気温付きで並べ、植物の伸びや動物の見られ方を比較する。姿が見えなかったことと数が減ったことを区別して理由を考える。根拠の指し示し方や説明の修正を見ることで、教師は次に何を確かめればよいかを判断できる。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第4学年〕 B 生命・地球(2)	(2) 季節と生物 身近な動物や植物について、探したり育てたりする中で、動物の活動や植物の成長と季節の変化に着目して、それらを関係付けて調べる活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
〔第4学年〕 B 生命・地球(2)ア (7)	(7) 動物の活動は、暖かい季節、寒い季節などによって違いがあること。
〔第4学年〕 B 生命・地球(2)ア (1)	(1) 植物の成長は、暖かい季節、寒い季節などによって違いがあること。
〔第4学年〕 B 生命・地球(2)イ	イ 身近な動物や植物について追究する中で、既習の内容や生活経験を基に、季節ごとの動物の活動や植物の成長の変化について、根拠のある予想や仮説を発想し、表現すること。

単元の目標

暖かい季節になると、身近な動物の活動や植物の成長の様子が変わることを理解し、実物の観察・実験と記録を扱う技能を身に付ける。「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。
(B(2))

評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①暖かい季節になると、身近な動物の活動や植物の成長の様子が変わることを理解している。 ②実物の観察・実験と記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。	①「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」について、比較した資料や記録から根拠を選び、事実と自分の考えを区別して説明している。	①季節と生き物(2) ○夏の生き物の学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

単元の流れ

啓林館の年間指導計画の配当「4」を参照。全4時間は公式資料に掲載された基本配当。以下の各次への配分と本時の位置は本資料の授業案であり、出版社の授業配当の転載ではない。学校の年間計画と観察・調査の進み方で調整する。公式資料の4～7月

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○春の記録を読み返す。	知①・知②（記録・活動の観察）
第2次	2	○同じ対象の夏の姿を観察する。	知①・知②（記録・活動の観察）
第3次	3	○気温と生物の変化を関係付ける。	知①・知②（活動の観察・記録）
第4次	4 （本時を含む）	○秋に確かめる予想を表す。 ○記録を根拠に、中心の問いへの自分の説明を確かめ直す。	思①（記録を用いた説明）・態①（説明を見直す過程）



本時の案

本時の目標：「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」について、資料や記録のどの事実を根拠にしたかを示し、自分の考えを説明できる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	○本時で使う記録を見て、問い「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」を確かめる。 【めあて】根拠の記録を示して、自分の説明を確かめ直そう。 ○一人で今の考えと、確かめたい点を書く。 〈予想される児童の反応〉 ・この記録を使って、自分の考えを説明したい。 ・前の考えと合わないところがある。	・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。 ・暑さ指数や学校の基準に従って野外観察を中止できるよう、既存写真も用意する。
展開 （ 分）	○これまでに集めた観察・実験の記録を使って、次の比較と考察を行う。春と同じ対象の記録を日付と気温付きで並べ、植物の伸びや動物の見られ方を比較する。姿が見えなかったことと数が減ったことを区別して理由を考える。 ○「どの部分を比べて、そう考えましたか」 ○根拠の箇所を指し示して説明し、相手の説明との違いを聞く。 ○資料から分かることと、まだ分からないことを分けて書き直す。 〈予想される児童の反応〉 ・春と同じ木なのに、葉が増えている。気温の記録も比べたい。 ・この記録のここが、そう考えた根拠になる。	・記録する場所が違うのに季節だけの影響と断定する場合、場所と時刻を確かめる。昆虫が見つからない理由を絶滅と決めない。 ・結果に合わない意見も記録へ戻す材料として取り上げ、発言した児童を責めない。 ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。 ◎思①「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」について、比較した資料や記録から根拠を選び、事実と自分の考えを区別して説明している。（個人の記録と説明、交流後の修正理由から見取る。）
まとめ （ 分）	○本時の問いへの答えを、根拠となる観察結果とともに書く。 【まとめ】暖かい季節になると、身近な動物の活動や植物の成長の様子が変わる。 ○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・最初の説明に、根拠にした記録を書き足せた。 ・まだ確かめていないところは、次の問いとして残した。	・まとめは得られた記録の範囲に限定する。予定どおりの結果が出なければ条件と方法を見直し、実測結果を作り替えない。 ・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。 ◎知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

板書の構造

上段に問い「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」。左に児童の最初の考え、中央に根拠として選んだ記録や資料、右に確かめ直した説明を置く。記録には対象・条件・時期を添え、同じ観点で比較する。下段のまとめは「暖かい季節になると、身近な動物の活動や植物の成長の様子が変わる」。確認できた事実と残った疑問を別欄にし、実測していないことを書き足さない。

つまづきやすい所と手当て

記録する場所が違うのに季節だけの影響と断定する場合、場所と時刻を確かめる。昆虫が見つからない理由を絶滅と決めない。

準備するのは、学級で使う実物や資料と、対象・条件・時期を対応させて残せる記録用紙である。教師は事前に資料の出典や器具の働きを確かめ、児童に渡す記録と教師の説明を区別する。暑さ指数や学校の基準に従って野外観察を中止できるよう、既存写真も用意する。

本時の評価で説明と根拠が結び付かない場合は、言葉を追加して教え込む前に、比べる対象がそろっているかを見直す。口頭では説明できるが記述が難しい場合は、図と指差しも証拠として残す。

プリントの案

季節と生き物(2) ○夏の生き物の問いと記録

上段は「調べたいこと」と「最初の考え・理由」。中央は対象、条件・時期、分かった事実、確かめた方法の欄。春と同じ対象の記録を日付と気温付きで並べ、植物の伸びや動物の見られ方を比較する。姿が見えなかったことと数が減ったことを区別して理由を考える。下段に事実から考えた説明と残った疑問を書く。教材本文・写真は印刷せず、利用できる実物や公的資料の出典を書き入れる。

説明を確かめ直すカード

問い「春と比べて、夏の生き物の活動や育ち方はどう変わっただろうか」への自分の答え、根拠の記録、友達の説明との共通点・相違点、修正した箇所と理由の欄を設ける。修正しない場合も根拠を確認した理由を書く。文字を書く代わりに図や口頭説明の記録も使える。

出典：小学校学習指導要領（平成29年告示）。本文は取得済みの文部科学省表V1.2と照合。

（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm）／国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校理科。評価の観点と記録を用いる考え方を参照。事例の文章は転載していない。

（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_rika.pdf）／啓林館年間指導計画。単元名・配当時数・掲載時期の出典。（https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/sho_r6/rika/file/rika_guidance_plan_standard.xlsx）

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

